

ダンス授業における「見る側」と「見られる側」の コミュニケーションについて

Teaching dance with the emphasis of communicating aspect

山 梨 雅 枝

Masae YAMANASHI

Abstract

When we teach students dance at school, compared with other P.E.(physical education) lessons there are lots of different aspects. For that reason, dancing lessons tend to cause specific problems. In this work, first, problems of dancing classes are confirmed, then the problems derive from the property of dances are cleared. Dance is a communication tool. A structure of dance has view points of a "dancers(performers)" and "audience". When we teach dance, the structure is formed. The "audience" should learn the manner of appreciations, in order to communicate effectively.

Teachers should tell students that dance lessons are for communication in great detail. This can make dance lessons progress smoothly, the "audience" come to know the importance of learning the dance language, students can enjoy dance lessons, students obtain better understandings and interests of the appreciation of dance, and moreover, "dancers" can get pleasure from expressing of non-verbal communications.

Keywords: dance lessons, dancers and audience, communication, the manner of appreciations

I. はじめに

本論は「新学習指導要領改訂」によって、平成24年から中学1・2年生で必修化されることになったダンスについて、体育授業で扱う場合に生じる問題点を指摘し、その解決法について論じるものである。

松本は『ダンス表現学習指導全書』と『ダンスの教育学』で、「踊る・創る・観る」がダンス活動の基本であると捉えている⁽¹⁾。この「踊る・創る・観る」という3つについて言及したことは、ダンスの教育の上で非常に重要である。なぜならば、この3つは、ダンス教育の上でなくてはならない要素であり、ダンス教育を研究する場合、必ずこの3つのいずれかに関連するからである。さらに「自分のもたない新しい個性にぶつかることは、自己にめざめ、他者を理解するに至る機会であり」「すぐれた作品の鑑賞と機会をもつ

ことは、創作と同等に重要なことと考えられるだろう」と述べているように⁽²⁾、鑑賞の重要性を説いている。創作過程においても常に鑑賞されることを念頭において創作すべきであると指摘したうえで「鑑賞には、作品の意図にすなおに近づくという把握の態度と作者の意図のすきを埋めて、みずから連想し、抵抗し、共鳴しつつ、作品の印象を作成し形成させる態度とが共存しているとみなければならない」と指摘し、「作者と観者とのコミュニケーションによって作品は成立する」と述べている⁽³⁾。松本が指摘する鑑賞の態度は作品への理解に対する態度であり、鑑賞場面における鑑賞者のマナーとしての態度ではない点に注意したい。ダンスの授業におけるコミュニケーションについての先行研究は、教材や授業づくりを軸として、共に踊ったり、創作する過程でのコミュニケーションに注目した研究が多い。しかし、ダンス授業における「見る側」と「見られる側」との関係によるコミュニケーションについて言及した論文は管見の限り

日本女子体育大学（非常勤講師）

見られない。

そこで本論では、学習内容が「表現運動」から「ダンス」へと発展し、授業の展開のなかで、生徒が分担した役割を果たそうとする態度を養うことに重点がおかれた中学1・2年以降を対象として、ダンス発表時の「見る側」と「見られる側」という構造において、鑑賞のマナー態度から「見る側」と「見られる側」のコミュニケーションがダンス授業において円滑におこなわれる為にどのようなマナーで鑑賞すべきかについて述べたい。

本論では、ダンスの授業を展開するときに構築される関係性について論ずる場合は、「見る側」「見られる側」というように生徒を分けて表現する。また、授業に参加する生徒を主体にした場合は「鑑賞者」と「踊り手」と表現する。

Ⅱ. ダンスの特性とダンス授業

1. ダンスの特性

片岡は『舞踊学講義』の中で、「芸術作品は、〔中略〕作者の自己目的的な産物であるが、そこで完了はせず、〔中略〕舞踊でいえば上演という形をとって、外に対して開かれたとき、つまり鑑賞者の解釈を待って初め完成する」と述べ⁽⁴⁾、芸術作品には、鑑賞者と表現者とが存在し、ダンスにも必ずこの二者が存在することを示している。これは前述の、「観る側」(鑑賞者)と「見られる側」(踊り手)という構造のことである。ところで、ダンス以外にも、同じ舞台芸術として演劇があげられるが、どちらも表現者としての完成度を目的とする側面を持ち、「見る側」と「見られる側」という構造が同じであっても、ダンスのほうが、物語性に対するノンバーバルコミュニケーションによる曖昧さの度合いが高い。以下この点を説明すると、ノンバーバルコミュニケーション(nonverbal communication)とは、非言語コミュニケーションのことであり、話し言葉によらない伝達手段を通じて、人々の間でメッセージを伝達することである。言語以外のシンボルやサイン(記号)とは、ダンスの場合、「身振りや顔の表情などの人間の相互作用に用いられるシステム」である⁽⁵⁾。林は、「人間の表情はおそらく他者との生存を共にするところから生まれてきた生理的反応であろうから、無意識的には自己の発信を受け取ってくれる他者を想定しているのであろう。これ

が身体によって語られる言葉であり、他者によって意味が読みとられることによってコミュニケーションが成立する。コミュニケーションに現れる身体というのは科学の対象となるような単なる物理的実体ではなく、心を包含して表情を伴った身体であり、それに反応する身体もまた表情をもっている」⁽⁶⁾と、ノンバーバルコミュニケーションを説明している。

このように、ダンスは、言葉を使用しないノンバーバルコミュニケーションである。ダンスの言語は、言葉の言語よりも指示機能が曖昧になり、作品の意図について鑑賞者が困惑するということが生じ易い。このように、ダンスは解釈の範囲が広いことは、コミュニケーションの混乱を生みやすく、鑑賞者に作品の解釈能力を要求する。ダンスの独自の言語を、松澤は舞踊言語とよんでいる⁽⁷⁾。

御手洗も、ノンバーバルコミュニケーションの特徴として「あいまいさ」を挙げており、メッセージの読解や解釈が多岐にわたるため、困難で誤解が多いことを指摘している⁽⁸⁾。

言葉を用いた会話では、話し手の意図が聞き手に的確に伝わりやすいため、解釈の混乱が生じにくい。しかし、ダンスは鑑賞者自身により多くの自由が与えられている。この自由な解釈が許されていることが、ダンスにおけるコミュニケーションの特徴であり、面白さといえる。

柴も「コミュニケーションにも、他の人々、他のものとのコミュニケーションだけでなく、自分自身とのコミュニケーションというものが存在する」⁽⁹⁾と述べているように、ダンスの享受体験は、相手の自由な表現を認めると同時に、それを認めた自分の自由な解釈をも認めるという自分自身とのコミュニケーションも必要なのである。

2. ダンス授業における発表場面

細川の実践報告では、中学3年生男女必修のダンス授業において、8時間の単元計画と実践について報告している⁽¹⁰⁾。単元の前半(1～3時間目)は即興表現を中心に扱い、踊るからだと心を準備させた。単元後半(4～8時間目)からは、最終発表会を目標に作品づくりに取り組んでいる。

細川の報告によると、単元後半6時間目の中間発表で、「恥ずかしさ」が先行してしまったグループの存在を指摘する。このときの細川の対処法としては、鑑

賞側の生徒の「空間を大きく使うのは良いけど、もっと同じグループ内で関わり合って、楽しそうに踊るともっと良くなると思う」というアドバイスを紹介し、この段階で踊りのアドバイスを受けるという方法は、「見られる側」にとって新たな視点をもらったことによる改善の機会となり、「見る側」は鑑賞する目を鍛える場になった、と述べている。その結果、7時間目の授業では、中間発表のアドバイスや、他のグループの発表を参考に、自分たちの作品の質を高めていく姿が見られたと報告している。以上の報告で、まず注目したいのは、6時間目の中間発表で「恥ずかしい」が先行したグループが存在した、という点である。

平成24年度から男女必修となる中学1・2年のダンスの目標で、ダンスは「イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通じて仲間とのコミュニケーションを豊かにする運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることを楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」とある⁽¹¹⁾。一般的に芸術に属しているダンスは、「運動」と捉えている体育の授業においても同様にその構造が形成される。

すなわち、体育では中学校の段階で、コミュニケーション能力の育成を謳い、ダンスという分野でも仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視している。

ここで採り上げた中学校指導要領解説の抜粋にもあるように、中学校におけるダンス教育の基本的要素をなす因子は、コミュニケーションにあるといえる。

ダンス授業においても、ダンスは「見られる側」によって表現された一人ひとりの個性は、「見る側」に受け入れられることによって初めて成立する。つまり、「見る側」と「見られる側」のコミュニケーションによって展開されていくのである。他のスポーツは、コミュニケーションを通じて、得点やタイムを競うことが目的であるのに対し、ダンスの最終的な目的は、「見る側」と「見られる側」のコミュニケーションにある。

学習指導要領解説には、保健体育科の改善の基本方針では、(イ)に「集団生活や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」と明記されており⁽¹²⁾、中学校学習指導要領解説では、具体的な例として「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」とある⁽¹³⁾。つまり、本質的にコミュニケーションを重視するダンス

は、体育の目標の一つであるコミュニケーション能力を育むのに、適切な分野であるといえる。

そもそも、コミュニケーション (communication) とは、「伝達、交際」という意味がある。つまり、他者との関係を考えるときにコミュニケーションが必要になってくることは、言うまでもない。そこでもう一度ダンスの本質を確認すると、「見る側」と「見られる側」との間で、身体を用いてコミュニケーションをおこなうことである。

その際に、ダンスの授業では身体を使って踊り、言葉を使わずに表現をしなくてはならないのが特徴であり、ダンスが言葉を伴わないコミュニケーションツールとして機能しているという。そのツールとは身体であり、ノンバーバルコミュニケーションによって展開されていくのである。

ダンス授業において、互いに認めあうためのコミュニケーションが最もおこなわれる場面は、「見る側」と「見られる側」が形成される発表の場面である。発表の場面では、授業に参加している生徒は例外なく「見られる側」と「見る側」になる。つまり、「踊り手」は「鑑賞者」に対し、ダンスというコミュニケーションツールを介して表現し、「鑑賞者」は「踊り手」の舞踊の言語を読み解いていく必要がある。

同時に「踊り手」も「鑑賞者」を「見ている」という関係を忘れてはいけない。「踊り手」は、自分の表現を「鑑賞者」が受け取ろうとしているか「見ている」のである。その状況で、「鑑賞者」が踊りを見ていなかったり、鑑賞に集中していない態度をとれば、「踊り手」は自分の表現に自信がなくなり、発表の場面で自分が思った通りの表現ができなくなる可能性がある。「踊り手」と「鑑賞者」の双方が、コミュニケーションをおこなおうとする努力が必要なのである。

しかし、ダンスを体育の授業で扱う場合、このコミュニケーションを阻害する場合がある。体育の授業で扱う種目は、競技としての側面が強いものが多い。その場合、学習者同士における「見る側」と「見られる側」の間には、共通の認識が生まれやすい。ところが、ダンスの場合は必ずしもそうではない。「見る側」の解釈を待って初めて完成するという芸術的側面を持つダンスにおいては、「見られる側」の表現をどの様に汲み取り、評価するかが難しいからである。

授業の初期段階では「見る側」と「見られる側」という構造を受け入れられる生徒と受け入れられない生

徒がおり、「ダンスを見るのは好きだが、自分が踊るのは苦手」という生徒が多い。その理由の一つとして、ダンスのノンバーバルコミュニケーションとしての表現の難しさがあげられる。七澤は、表現・創作ダンスの運動の特性である表現とは、「表したいイメージや思いを工夫した動きで自由に踊ることである」と述べている⁽¹⁴⁾。

しかし、生徒は自分の身体によるノンバーバルな表現が、表現したい内容やイメージにふさわしい動きであるか、という不安を抱きやすい。この不安は、「常に新たな関係を生み出していく創造的な学びを求めるダンスの学びの性格は、技を手がかりに、『わかって・できる』ようになる、を求める課題解決型の学習と基本的に異なる」という細江の指摘にあるように⁽¹⁵⁾、ダンスは、学習者が共通認識すべき決められた正解が不明瞭であり、学習の到達目標が学習者に伝わりにくいいため、学習者は不安を抱き、その不安はやがて身体で表現することへの「恥ずかしさ」へとつながっていくと考えられる。

また、もう一つの理由は、仲間の前で自分の身体を晒すような行為そのものに対して「恥ずかしさ」を覚えるためである。「恥ずかしさ」が生じては、ダンスでおこなうべきコミュニケーションが十分に発揮することができない。以下の節では、ダンスを中学校の体育授業でおこなうにあたって、阻害要因となる「恥ずかしさ」について考察し、問題点を明らかにする。

3. ダンス授業の阻害要因としての「恥ずかしさ」

高橋も述べているように、多くの生徒はクラスの雰囲気や他人の視線に必要以上に敏感である⁽¹⁶⁾。生徒は、どうやって身体をコントロールして動いたらいいのか分からない、という不安によって、他人の視線を必要以上に意識してしまっている。最初に抱いた不安は、次第に「恥ずかしさ」へと変わっていく。それでは、単純に踊り方を教えれば、不安なく踊れるようになるかという、そうではない。

体育の授業で取り上げられる運動の大多数は、競技スポーツであり「タイムを競ったり、得点を取り勝敗を決める運動」であったり、「目標とする動き」が明確な運動が多い。しかし、ダンスは明確な目標が見えにくいという、他人に見られるという「恥ずかしさ」を助長する場面が多い。

麻生は、ダンス学習において生徒が「恥ずかしい」

と感じる内容を以下の2つにまとめている⁽¹⁷⁾。

①「他者に自分の身体を見られることを意識する場合」

具体的には、正確に把握しにくい自分自身の身体を人に見られることに対して抱く不安、あるいは恐怖、また、性的象徴部分を人に見られる恥じらい、劣等感を抱く部分を見られる抵抗感などである。

②「動きやアイディアに自信がない場合」

これについては、次の5つの内容を具体的に挙げている。

- (1) 教師が示した内容が、生徒にとって高度すぎて理解できなかった場合。
- (2) 自分の動きやアイディアに対して他者からの悪評・批判・否定を恐れる場合。
- (3) 動きやアイディアのイメージが不鮮明、あるいは身体的能力が低くイメージ通り動けない場合。
- (4) 興味・意欲が低いために、教師の発問への集中を欠き、何をしてもよく分からない場合。
- (5) 表現運動・創作ダンスは、幼稚だと思い込んでしまった場合。

このように、ダンス授業において「見られる側」が「恥ずかしさ」を感じる時を、2つに分類することができる。それは、動きへの理解が十分でないために生じるものと、他者の視線によって生じるものである。前者については、先行研究などで論じられている⁽¹⁸⁾にもかかわらず、後者の視点における研究はなされていない。しかし、これはダンス教育という観点から重要であると考えられるため、本論では、特に後者の他者からの視線による「恥ずかしさ」に注目したい。

ダンス授業において、もっとも「恥ずかしさ」を感じる瞬間はいつだろうか。それは、まぎれもなく「見る側」(鑑賞者)と「見られる側」(踊り手)という構造が生じる、発表の場面であり、自分が「見られている」と意識する瞬間である。ダンス授業において、「恥ずかしさ」は避けることのできない問題である。授業を展開していく過程で、ある程度「恥ずかしさ」は軽減されていくかもしれない。しかし発表時は、他者の視線を最も感じる瞬間であり、「恥ずかしさ」を感じやすい。渡辺が「他者の視線を意識したときに、より強くはざかしいと感じる」と指摘している通りである⁽¹⁹⁾。

Ⅱ-2での細川の実践報告では、結果として「恥ずかしさ」を克服できていたが、もしも克服できなかった場合、この段階でダンス授業として継続するのが難しくなってしまう。「恥ずかしさ」を強く抱いたため

に表現ができなくなってしまうと、ダンスの授業は成立しないし、生徒が強い「恥ずかしさ」を抱いたまま授業を展開してしまうと、ダンス嫌いの生徒を増やしかねない。

ところが、この「恥ずかしさ」は、ダンスはコミュニケーションであるという本質を利用すれば、解決することが可能である。細川の報告では、6時間目に「恥ずかしさ」が先行してしまったグループに対して、鑑賞者側の生徒のアドバイスを紹介している⁽²⁰⁾。これは「見る側」の指摘から、「見られる側」自身も表現したい内容について、より明確に自覚できるようになったのである。そのため、自分たちの作品づくりに集中して取り組み、先行していた「恥ずかしさ」が問題となくなくなったのである。すなわち、6時間目のダンス発表で、「見る側」「見られる側」との間にコ

ミュニケーションが成立したからこそ、それ以降の授業展開が円滑に進められていたということである。この事例は、ダンスの本質であるコミュニケーションが的確におこなわれさえすれば、「恥ずかしさ」の問題が解決されるという一例にもなり得ることを表している。

4. 発表の場における鑑賞者の態度

鑑賞するという「見る側」の役割について確認するために、学習指導要領の内容、つまり指導内容である「(1) 技能」「(2) 態度」「(3) 知識、思考・判断（小中学校は思考・判断）」の「(2) 態度」に注目したい。

以下に、ダンスにおける他者と関わる「態度」について、学習指導要領より抜粋してまとめた。

ダンス学習における他者と関わる「態度」の育成

	小 学 校			中 学 校		高 校
	1・2年	3・4年	5・6年	1・2年	3年	1・2・3年
	様々な動きを身につける時期		多くの運動を体験する時期		少なくとも1つのスポーツに親しむ時期	
態 度	・だれとでも仲良く踊る	・だれとでも仲良く練習や発表をする	・互いのよさを認め合い助け合って練習や発表をする	・よさを認め合おうとする ・分担した役割を果たそうとする	・お互いの違いやよさを認め合おうとする ・自己の責任を果たそうとする	・お互いに共感し高め合おうとする ・役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとする

この表からもわかるように、中学校以降は「役割を果たす」という、グループのなかの自分の役割を認識し、責任を果たそうという姿勢を育むことが加わっている。ダンスの発表場面では、当然「見る側」に作品を鑑賞するという「役割」がある。

松本も、「表現とコミュニケーションは、本来一体のものであり、観られることによって表現は成立する」⁽²¹⁾と述べているように、ダンス表現は「鑑賞者」の存在なくしては成立しないのである。「鑑賞者」は、単に作品や踊り手を眺めていては、鑑賞することにはならない。ダンスは、作品を鑑賞する「役割」と、表現する「役割」を果たしてこそ、コミュニケーションが成り立つのである。

しかし、Ⅱ-3で指摘した通り、鑑賞の場こそ「踊り手」が最も「見られている」と意識する瞬間であり、「鑑賞者」の態度が未熟であった場合、「踊り手」は、安心して表現することができない。この不安感

は、やがて「恥ずかしさ」となる。それまでの単元がうまく展開されていても、発表の場面での経験は、ダンスの授業に対する生徒の満足感に影響をあたえ、このダンスに対するマイナスのイメージは生涯にわたって持ち続けるものになる可能性が高い。

七澤は、「ダンス授業では、『表現』の機会と『鑑賞』する場をセットで設け、それを継続しておこなうことで鑑賞のマナーを身につけ、発表者も安心して表現できるようになる」と述べている⁽²²⁾。しかし、鑑賞のマナーは、鑑賞を継続的におこなうだけでは、授業という限られた時間の中で効率的に身につけることはできない。

発表者である「見られる側」が安心した環境でダンスによる表現をおこなうためにも、「見る側」が鑑賞者としてのマナーを身につける必要がある。マナーが守られた肯定的な雰囲気の中で「見られる側」が発表に臨むことが、発表場面において授業を円滑におこ

なうための有効的な方法の一つであると考えられる。

そのため、教師は、鑑賞をおこなう前に「見る側」の鑑賞マナーとしての態度について指導をおこなうことが重要である。筆者の授業では、今までの考察を踏まえて、発表の前に必ず鑑賞の態度について、3つの約束事をしている。それらを以下にまとめたい。

① 鑑賞者は集まって鑑賞する。

体育館はダンスの発表をおこなうには広すぎる場合が多い。「踊り手」は「鑑賞者」が疎らに広がって鑑賞していると空間把握が難しく、どこを見て踊ってよいかわからなくなる。そのため自分の動きや表現に集中できなくなり、不安になり「恥ずかしさ」を生起させる。これらを防ぐためにも、「鑑賞者」は一か所に集まって鑑賞することが大切である。「踊り手」が、実生活で体験することが少ない状態に置かれていることを忘れてはならない。日常よりも「恥ずかしさ」が生じやすい状態にしているのである。そのことを念頭に置き、まずは舞台を整えて環境を整備する必要がある。

② 鑑賞中は、鑑賞者同士でしゃべらない。

発表中、作品によっては手拍子や掛け声、励ましの言葉で盛り上げることで、「鑑賞者」と「踊り手」との一体感を感じる効果がある。そのため、クラスの雰囲気任せて自由におこなってよいとしている。しかし、鑑賞者同士の会話は、踊り手の集中の妨げになるばかりでなく、「鑑賞者」が自分（踊り手）を誹謗、中傷しているのではないかという不安を与える。また、一生懸命に発表している相手を無視して会話をすることは、一般的な鑑賞態度としても、非常に失礼な態度であるため、厳に慎むべきであろう。ダンス発表中は、「見る側」（鑑賞者）と「見られる側」（踊り手）の間で、ノンバーバルコミュニケーションがおこなわれているのである。そのことを生徒達に実感させなくてはならない。鑑賞者が、踊り手以外と会話している状態は、「見る側」（鑑賞者）と「見られる側」（踊り手）との間に形成されるべきコミュニケーションに対して、他者が邪魔をしていることになってしまう。それでは、言語を介さずにおこなうコミュニケーションが円滑に進むことなど不可能である。

③ 発表終了後は、拍手をする。

演技終了後は、達成感や緊張からの解放等があり、「踊り手」も現実に戻る瞬間である。そこで「踊り手」

が気になるのは、「鑑賞者」の反応である。

拍手には、「踊り手」にとって「よかったよ」「おつかれさま」というような言葉と同じ意味を持つ。つまり発表後の拍手は、仲間の演技を称え、よさを認め合う作業なのである。小林も、拍手のメッセージとして「ありがとう」「おめでとう」「そのとおり」「がんばれ」「よくやった」を挙げ、これらのメッセージに共通しているのは、相手に対する友好や親和の気持であると述べている⁽²³⁾。拍手をすることは、「鑑賞者」から発せられる最後のコミュニケーションであり、ダンスにおいて、目には見えない内なるものを目に見えるものに変換し、「踊り手」と「鑑賞者」の間で最後のコミュニケーションを交換し合うことを約束することで、安心して発表できる場がつくられると考えられる。

以上の3つの約束により、「踊り手」は肯定的な雰囲気なかでのびのびと表現できるようになるのである。

この「鑑賞者」の態度こそ「よさを認め合おうとする」⁽²⁴⁾態度であり、最後の拍手はその態度の表れなのである。

新学習指導要領で、発達の段階のまとまりを踏まえた指導内容の系統化がおこなわれた。片岡は、以前から「小学校における表現運動は、自由に動きを工夫して踊る創造的な学習で進められるのが特徴であり、それ故に表現運動は『違いがあるから面白い』自由で開かれたダンスである」と述べている⁽²⁵⁾。この「違いがあるから面白い」という考えを、初等教育の段階でしっかりと身につけさせ、中学・高校のダンス授業でも実践を重ねていくことが重要である。なぜなら本論で確認してきたように、自分是他者に比べて劣っているのではないか、他者から悪い評価を受けるのではないか、という恐怖心は「恥ずかしさ」につながるケースが多いからである。この基礎ができていれば、「見る側」と「見られる側」の間で、より有効的なコミュニケーションをおこなうことができるのである。

松澤は、「ダンスとは身体が時間・空間をどう分節するか（という在り様・在り方）を呈示することであり、ダンスを享受体験することは、この身体による時間・空間の分節を共有し合うこと、何かを（言葉言語的に）理解することではなく『共振する』ことである」と述べ、「（ダンスは）言葉言語によるコミュニケーション回路を経ずに（つまり理解することよりも）、まず直接的に共振し合うことによって成立する

コミュニケーションである」]、と述べている⁽²⁶⁾。ダンスは、身体が共振してこそ成立する、コミュニケーションなのである。

Ⅲ. まとめ

以上、本論で述べたように、ダンスの授業においては、ダンスの本質であるノンバーバルコミュニケーションについて念頭に置き、授業を展開することが必要である。「見る側」は「踊る側」の舞踊言語を理解しようとする肯定的な態度が不可欠であり、教師はその場を提供する努力を尽くさねばならない。

中学1・2年以降、学習内容が「表現運動」から「ダンス」へと発展し、授業の展開のなかで、生徒が分担した役割を果たそうとする態度を養うことに重点がおかれる。と同時に、体育では、「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」であり、ダンスの本質を再度確認することは、この目的にも合致するのである。

教師は、ダンスはコミュニケーションを相互に図る場であるということを、より丁寧に生徒に伝えていかななくてはならない。そのことは、授業を円滑にするだけでなく、「見る側」も舞踊言語を読み解く重要性を知り、更には鑑賞することの面白さを学び、広く舞踊鑑賞への関心を深めさせることも可能になり、「見られる側」もノンバーバルコミュニケーションで表現する喜びを得ることができるのである。

ダンスは、言語を用いないコミュニケーションの場を提供する、体育の授業の中では特殊な領域といえる。それは、ダンスが芸術的側面を持ち合わせているからである。「見る側」は単に他者の動きを参考にするために見ているのではない。ダンス授業において、鑑賞することは、踊りながら表現することと相互に作用していく学習方法なのである。本稿であげた鑑賞の態度に関する3つの約束は、一つの試みを提示したに過ぎない。しかし、教師はこれらのことを常に意識して授業を展開すれば、ダンスの授業は多くの生徒に受け入れられていくのではないだろうか。

今後、授業の実践研究などをおこなうことで、研究を更に深めていきたい。

注

- (1) 松本千代栄『ダンスの教育学 第1巻ダンス教育の原論』徳間書店 1992 p.212.
- (2) 松本千代栄『ダンス表現 学習指導全書』大修館書店 1980 pp.99.
- (3) 前出『ダンス表現 学習指導全書』大修館書店 1980 pp.97, 東京.
尚、下線は筆者による。
- (4) 片岡康子『舞踊学講義』大修館書店 1991 p.93
- (5) 御手洗昭治『異文化にみる非言語コミュニケーション—Vサインは屈辱のサイン?—』ゆまに書房 2000 p.3
- (6) 林信恵『舞踊学講義』大修館書店 1991 p.79
- (7) 松澤慶信 2007 授業レジュメ
- (8) 前出『異文化にみる非言語コミュニケーション—Vサインは屈辱のサイン?—』p.22
- (9) 柴眞理子『身体表現～からだ・感じて・生きる～』東京書籍 1993 p.62
- (10) 細川考博「互いに認め合い、自由に自分を表現できる生徒の育成を目指して～生徒を変えるダンスの授業のヒント～」『女子体育』2011 p.23
- (11) 文部科学省「中学校指導要領解説 保健体育編」東山書房 2008 p.118
- (12) 前出「中学校指導要領解説 保健体育編」東山書房 2008 p.3
- (13) 前出「中学校指導要領解説 保健体育編」東山書房 2008p.16
- (14) 前出『新版体育科教育学入門』「ダンスの教材づくり・授業づくり」p.180
- (15) 細江文利「新学習指導要領とこれからの体育学習～新しい学びとしてのダンスの可能性～」『女子体育』2008 (50) p.8
- (16) 高橋うらら「誰もが表現者になれる授業の雰囲気づくり」『女子体育』2007 (49) p.2
- (17) 麻生和江「表現運動・創作ダンスの学習における『恥ずかしさ』について」大分大学教育学部研究紀要 10 (2) 1988 p.337f
- (18) 副島裕妃子「現代に生きる子どもたちに必要な力と喜びを～学体研（全国学校体育研究大会）発表を通じて～」『女子体育』2011 (53) pp.20-25
- (19) 渡辺弘純、岡崎有希子、David S.Crystal「日本の大学生における『はづかしさ』の生起に関する研究」『愛媛大学教育学部紀要』(44) 1998 p.26
- (20) 前出「互いに認め合い、自由に自分を表現できる生徒の育成を目指して～生徒を変えるダンスの授業のヒント～」『女子体育』2011 p.23
- (21) 松本千代栄『ダンスの教育学 第1巻 ダンス教育の原論』1992 p.211
- (22) 前出『新版体育科教育学入門』「ダンスの教材づくり・授業づくり」p.182
- (23) 小林朋道『ヒトはなぜ拍手をするのか 動物行動学から

みた見た人間』新潮社 2010 p.33

24 前出「中学校指導要領解説 保健体育編」p.26

25 前出「新学習指導要領改訂のポイントとこれからのダンス授業」『第44回全国女子体育研究大会』p.64

26 前出 授業レジュメ

参考文献

著 書

- 1) 御手洗昭治 (2000)『異文化にみる非言語コミュニケーション—Vサインは屈辱のサイン?—』ゆまに書房, 東京.
- 2) 片岡康子, 林信恵 (1991)『舞踊学講義』大修館書店, 東京.
- 3) 小林朋道 (2010)『ヒトはなぜ拍手をするのか 動物行動学からみた見た人間』新潮社, 東京.
- 4) 佐々木健一 (1995)『美学辞典』東京大学出版会, 東京.
- 5) 柴真理子 (1993)『身体表現～からだ・感じて・生きる～』東京書籍, 東京.
- 6) 高橋健夫, 岡出美則, 七澤朱音, 他 (2010)『新版体育科教育学入門』大修館書店, 東京.
- 7) 松澤慶信, 山梨雅枝 (2010)『明日の授業から使える現代的なリズムのダンス』フラックス・パブリッシング, 東京.
- 8) 松本千代栄 (1980)『ダンス表現 学習指導全書』大修館書店, 東京.
- 9) 松本千代栄 (1992)『ダンスの教育学 第1巻ダンス教育の原論』徳間書店, 東京.

雑誌

- 10) 麻生和江 (1988)「表現運動・創作ダンスの学習における『恥ずかしさ』について」大分大学教育学部研究紀要 10 (2): 331-339.
- 11) 片岡康子, 村田芳子 (2010)「新学習指導要領改訂のポイントとこれからのダンス授業」『第44回全国女子体育研究大会』: 61-72.

12) 斎藤潤, 片岡暁夫 (1983)「ダンスにおけるコミュニケーションと鑑賞者の役割りについての一考察」日本体育学会大会号 34: 78.

13) 細川考博 (2011)「互いに認め合い、自由に自分を表現できる生徒の育成を目指して～生徒を変えるダンスの授業のヒント～」『女子体育』 53: 20-25.

14) 島内敏子 (2002)「ダンスとコミュニケーション」『女子体育』 44: 28f.

15) 副島裕妃子 (2011)「現代に生きる子どもたちに必要な力と喜びを～学体研(全国学校体育研究大会)発表を通じて～」『女子体育』 53: 20-25.

16) 高橋うらら (2007)「誰もが表現者になれる授業の雰囲気づくり」『女子体育』 49: 26-31.

17) 古木竜太 (2010)「“恥ずかしさ”を払拭する身体表現授業とは～保育者養成課程における3年間の実践より～」『女子体育』 52: 40.

18) 細江文利 (2008)「新学習指導要領とこれからの体育学習～新しい学びとしてのダンスの可能性～」『女子体育』 50: 8f.

19) 渡辺弘純, 岡崎有希子, David S. Crystal (1998)「日本の大学生における『はづかしさ』の生起に関する研究」『愛媛大学教育学部紀要』 44: 17-38.

その他

- 20) 東京書籍編集部 (2008)「中学校学習指導要領 ちがいがわかる 新旧対照表」東京書籍, 東京.
- 21) 文部科学省 (2008)「中学校指導要領」東山書房, 京都.
- 22) 文部科学省 (2008)「中学校指導要領解説 保健体育編」東山書房, 京都.
- 23) 松澤慶信 (2007) 授業レジュメ

(平成23年9月12日受付)
(平成23年12月19日受理)